＊連載「地域再生」―そこにしかない「人」と文化の価値③

「今」を生きている責任の重さ

―磨かれ続けた職人魂、弘前ねぷたと秋田竿燈―

福田　志乃　地域経営コンサルタント（地域政策プランニング代表）

今年の連載は昨年までとは志向を変えて、東北地方に伝わる国の重要無形民俗文化財の指定を受けている、三つの伝統祭の舞台裏を追っている。前回（12月6日号）は一週間で三百六十万人を集める青森ねぶたの舞台裏を探った。今回は、青森市から東北本線で一時間、リンゴの日本一の名産地・津軽の中心地である弘前市のねぶた祭りと、そこから日本海のリゾート列車といわれる五能線に乗り、世界遺産である白神山地を通過して四時間。緑の美しい穀倉地帯の中に現れる中核都市・秋田市の竿燈まつりについて紹介する。

祭りは、年に一度のものである。この三つの東北祭りの共通点は、①〝祭りの役者〟がいて、観光客は基本的には「観客」としてでしか参加できない②しかし、「観客」としてだけで十分に満喫できるだけの、日本でしか味わえない伝統文化・芸術である――ことだ。地方が衰退していると言われながら、いずれの祭りもわずか数日に数百万人の見物客を集め、一瞬にして一年分のエネルギーを出し切って燃え尽きる。

そしてまた、筆者は三つの都市を巡っている間に、祭りの会場や列車の中でたくさんの外国人にも出会った。これらの祭りには、世界の人々をも圧倒する「文化・芸術的価値や魅力」に加え、それを支える人たちの熱気や凄まじいまでの迫力や〝こだわり〟、すなわち伝統文化への誇りとそれを守り抜く意地すら感じることができた。人が創り出す素晴らしい芸術に酔いしれ、日常を忘れて爆発的な「生」のエネルギーを浴びたいがために、人は日本全国、いや、世界から東北の祭りを訪れるのだろう。

祭りの原点は「地域への回帰」

青森県には四つのねぶた祭りがある。青森ねぶた、弘前ねぶた、黒石ねぶた、そして五所川原の立佞武多である。起源はどれも同じだが、「ねぶた」の形や大きさ、祭りの運営方法などは、都市ごとにまったく異なる形で発展している。

残念ながら、弘前ねぶたについては、今回の取材では青森や秋田のような十分な情報・資料を得ることができなかった。しかし、祭り当日の作品や会場の熱気には、青森ねぶたと優劣付け難い「弘前ならでは」の素晴らしさがある。こうした点を筆者なりに、青森ねぶたとの比較で整理・考察してみたい。

青森と弘前、それぞれの〝こだわり〟

弘前市は、日本で三本の指に入る桜の名所としても知られる。二〇〇三年度のデータでは、二千六百本もの桜がお堀沿いに咲き誇る情緒を味わおうと、春の桜祭りに訪れた観光客は約二百七万人。一方、夏のねぶた祭りに訪れた観光客は百七十三万人である。弘前の集客は、この春と夏の二大祭りを合わせて、青森ねぶたに匹敵する規模といえる（総数三百八十万人、年間観光入り込み客数のシェアの九割）。しかし、同じ起源の、同時期に行われるねぶたといっても、集客数で祭りの優劣を評価できるものではない。その理由は、次に述べる二つの祭りのポリシーや作品を創る手法の違いにある。

図表3－1　弘前の「扇ねぶた」（筆者撮影）

【①「ねぶた」の創り方や形状の相違】

起源は同じ青森と弘前のねぶた。筆者が撮った祭り当日の写真を**図表3―1**、**図表3―2**として掲載する。青森ねぶたは前回も説明したように、主に「組ねぶた」といって、針金ですべての骨組みを作って和紙を貼り、彩色するという、指先一本、顔の凹凸に至るまで立体的に組み上げる手法である。作品の大きさも、幅九㍍、高さ五㍍という青森市内の幹線道路いっぱいの迫力である。そのため、〝ねぶた師〟の下絵の段階で、骨の組み方も彩色も、作品のすべての出来が決まってしまうといわれる。それはまるで、恐竜博覧会に行ってさまざまな形状や表情の恐竜たちに驚き楽しむ時のようで、作品には繊細さ以上に、大胆さやダイナミックさ、遠くから近づいてくる〝生き物〟に観客が一瞬にして惹かれてしまうような躍動感が求められている。

その一方で、弘前ねぶたは「扇ねぶた」といい、高さ六㍍、幅五・五㍍の平らな扇形の立体に、〝ねぶた絵師〟が、ろうと絵の具で絵を描く手法が主流である。そのため、通の見物人ならば、髪の毛一本一本の繊細さや色の滲み方といった、絵師の筆遣い一つ一つにまで目を凝らさねばならない。それは、美術館の絵画を一枚一枚、物語性を考えながらじっくり鑑賞するのに近い感覚である。

取材や祭りの後に資料を読み込んでいると、やはり青森ねぶたの「動」、華麗、躍動に対して、弘前ねぶたには「静」、威厳、出陣をテーマにしているという評価があった。どうりで、連日二つのねぶたを観ても飽きることなく、それぞれに違う魅力を感じられたわけだ。都市ごとに競争するのではなく、一つの県内に幾つものねぶた祭りがあることで、来訪者は「数日間にわたって、ねぶた三昧を満喫できた」という満足感を得られ、相乗効果をもたらす。今回の筆者の慌ただしい取材も、「八月の数日間を〝ねぶた追っかけ〟となって、青森県内を列車で巡り、食も風景も広く地域文化として楽しむ」という、想像もしていなかったほど豊かな旅となった。

祭りの主催者側の念頭にはないかもしれないが、青森市から津軽にかけての地域にとってみれば、「ねぶたの相違」は結果的に、優れた地域経営戦略となっているのである。

図表3－2　青森の「組ねぶた」（筆者撮影）

【②祭りの運営や地域の関わり方の相違】

青森と弘前で決定的に異なるのは、やはり、祭りそのものの運営手法や地域の関わり方だ。青森ねぶたは既に紹介したように、戦後の高度経済成長の波に乗り、企業の発展や都市空間の整備に合

わせて、作品の大きさもそれに掛ける費用も巨大化していった。青森ねぶたが「企業ねぶた」と言われ、大型ねぶたは最大二十五台と数は制約しながらも、一台に千五百万～二千万円の費用を掛けるのに対し、弘前ねぶたは「地域ねぶた」と言われ、参加したい人なら誰でも出すことができる。実際、町内会以外にも幼稚園や小・中学校、商店街といったコミュニティーが出すねぶたが、何と毎年五十台以上もあり、延々と列をなす。

青森では〝ねぶた師〟の報酬は平均で四百万円程度で、そこから材料費や制作に関わった人たちへの報酬を払う。一方の弘前では、〝ねぶた絵師〟への報酬は平均七十万～八十万円で、あとは市からの僅かな助成である「ねぶた運行奨励金」と自分たちの積立金などで賄っているという。

ただ、前回も触れたが、近年、青森ねぶたの新たな取り組みとして、幼少時に自分たちが地域ねぶたを経験し、現在は子育て真っ最中の親となっている三十～四十歳代が中心となった「地域ねぶたの再興」が始まっている。観光客向けである八月のねぶた期間にこだわらず、今年も四十台を超える地域ねぶたが自主的に街に繰り出しているという。

幾多の時代の波を乗り越えても、祭りは〝地域〟とそこにいて守り伝える〝市民〟が原点であり、大きく成長しても必ず地域に回帰する。そのことに、二つのねぶた祭りの舞台裏を通して、筆者も改めて気が付いたところである。

郷土芸能に至る紆余曲折

それでは、次の舞台、秋田市に移ろう。秋田の竿燈まつりも、八月の四日間で約百四十万人（〇三年秋田県データ）を集客する国の重要無形民俗文化財である。その起源は、青森・津軽地域一帯に伝わる「ねぶた」と同じとされ、ネブリナガシと呼ばれる睡魔払いの七夕行事だったとの説が有力だが、定かではない。江戸時代の秋田一帯には、お盆の時期に精霊を迎えるために家々の前に高さ十二㍍もの細長い木を立て、横木を結んで灯籠を下げて「高灯籠」とする風習があったらしい。次第に横木を増やし、灯籠（提灯）の数も二個から四個、八個と増え、江戸末期には四十～五十個の提灯がぶら下がっていたとの記録がある。藩主が在城の際、各町の力自慢が灯籠を持ち、勢ぞろいして殿様へご覧に入れたそうだ。それが長い年月を重ねながら、現在では「力四分、技六分」と評される竿燈まつりへと成長していったのである。

明治時代になると、秋田市内でも竿燈の発祥地である「外町」と呼ばれる地区にも電線が張り巡らされ、竿燈を上げること自体が困難になる。一九〇五年（明治三十八年）時点で、竿燈は四～五本へと激減。この時、竿燈はその存続において最も厳しい時期を迎えていた。幸い、〇八年に皇太子時代の大正天皇が来県した機会に六十四本が出竿し、消滅の危機を免れている。三一年には、「竿燈を郷土芸能に育てよう」と有志が集い、八幡秋田神社で、神事とともに初めて妙技会が催された。この時初めて、竿燈関係者みんなの間で共有する「目標（志）」が表明されたことになる。ただ、当時は提灯が貴重品で、町の人たちは竹に桟俵（米俵の両端に当てる、わらで編んだ円形のふた）を吊して練習するような有様だったという。

その後、三七年の日中戦争開始で若者たちが戦争に駆り出されて休止。八年間の中断を経て復活してからは、祭りの日程を二日、三日と延長していき、国体や東京オリンピック、大阪万博などにも積極的に〝進出〟していった。

今や全国・世界に知られる秋田竿燈であるが、近代以降百年の歴史を垣間見るだけでも、その保存の道のりは、山あり谷ありだったのである。

昼と夜の「二味」楽しむ観光戦略

毎年夏の訪れとともに、市内の空き地や駐車場は、夕食を終えた子どもたちや仕事帰りのサラリーマンで賑わい出す。祭り当日には約二百四十本の竿燈が立ち並ぶが、街中がその練習場と化すからだ。秋田を離れて生活している勤め人や大学生たちも、竿燈を上げたり、お囃子に参加したりするために、八月近くになると秋田市に戻ってくる人が多い。秋田竿燈は、青森や弘前の鑑賞する作品を創る「ねぶた」と異なり、当日、演技者一人ひとりが身体に叩き込んだ〝妙技〟を披露し、観客を楽しませるものである。だから、生まれた時からお囃子を聴き、五歳くらいで「幼若」と呼ば

れる子ども向けの小さな竿燈を上げてきた秋田っ子は、夏の訪れとともに、身体が〝風〟や〝竹竿のしなり〟を想い出すのだ。

それでは、ここで少し、竿燈まつりについての基礎知識を紹介してみよう。

まず、竿燈には、大人が上げる「大若」、中・高生用の「中若」、小学四年生以上の「小若」、五歳から小学三年生までの「幼若」がある（**図表3—3**）。筆者自身もチャレンジしてみたのだが、何とか両足で踏ん張り、両手で「幼若」を支えるのが精一杯！という感じだ。それを五歳くらいの子どもが、額に乗せたり、片手で上げたり（**図表3—4**）。祭り当日には、大人顔負けの子どもたちがたくさん現れる。

次に竿燈の形状であるが、**図表3—5**のように、基本形は「親竹」という十二㍍の竹に九本の「横竹」が取り付けられ、全部で四十六個の提灯がぶら下がっている。それに「継竹」という一・三㍍の竹を、親竹の下に足していき、十五～六㍍の高さにまで上げて、技と高さとを競うのだが、多くても六本の継竹が限界だといわれる。提灯については、①一段目の二個の提灯の表には「七夕」の文字、裏にはそれぞれの「町名」を入れる②他の四十四個の提灯の裏には「町紋」を入れる——のが祭りの決め事である。

さらに、竿燈の演技を**図表3—6**（6㍍）で紹介する。五人の「差し手」（演技者）がリレーのように竿燈を引き継ぎ、以下の五つの基本技を次々と披露していく。

◆「流し」：一番手の演技。次の差し手が竹を継ぎやすいように起こした竿燈を高く支えて安定させる（写真は省略）。

◆「平手」：二番手、竿燈の基本技。継木で竿燈を受け、腕を伸ばした片手で高々と翳（かざ）し、指の間からずらして次の差し手へ渡す（写真①）。

◆「額」：三番手の見せ場。前の差し手から利き腕の掌（たなごころ）で竿燈を受け、自分の指の間からずらしながら静かに額に置く。静止して両手を大きく開いてバランスをとる大技（写真②）。

◆「肩」：四番手の、竿燈では最も覚えやすい技。利き腕の掌で受けて、真っ直ぐ肩におろす。利き腕と肩と軸足とを一直線に保つ（写真③）。

◆「腰」：五番手の最難関の大技。利き腕の掌で受け、指の間からずらして腰に乗せ、両足と上半身でバランスをとる（写真④）。

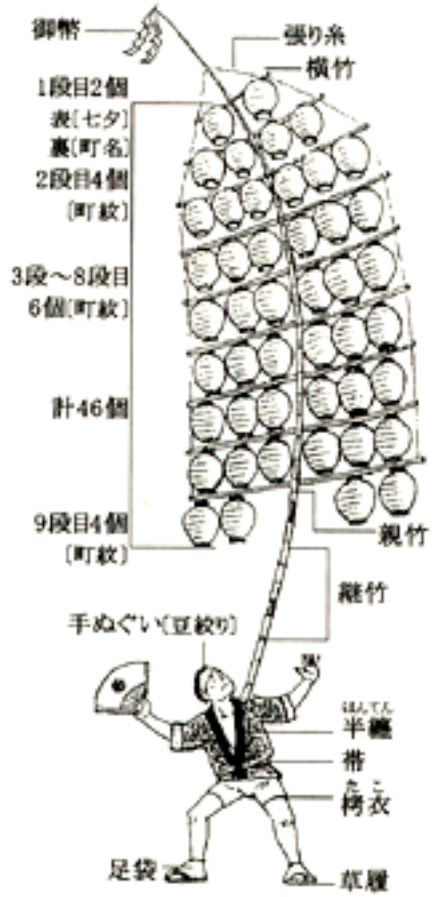
◇　◇

夜の竿燈まつりでは、観客は自分の前に止まった団体の演技しか観ることができない。そのため、各町内で磨かれてきたこうした妙技を多くの観客に披露するよう、昼間にも競技会として実施している。競技は直径六㍍の円の中で行われ、①各町

図表3—3　竿燈の種類と構造

	長さ(m)	重さ(kg)	提灯の大きさ(cm)	提灯の数
大若	12	50	64×45	46
中若	9	30	48×36	46
小若	7	15	48×36	24
幼若	5	5	30×21	24

図表3—5　竿燈の規定のスタイル



図表3—4　「小若」の妙技（筆者撮影）

内五人一チームで参加し、基本技を競う規定演技②大技や奇抜な演出を披露する自由演技の団体戦③小学四年生以上の「小若」団体戦――があり、観光客の間ではかなりの人気である。観光客の中には、昼の妙技会と夜の祭りの双方（二味）を楽しむために滞在する人も毎年増加傾向にあり、秋田竿燈の新たな観光戦略となっている。

華麗さの裏側にある〝厳しさ〟ゆえ

秋田竿燈の提灯には、同じ東北の光の祭典である青森や弘前の「ねぶた」とは違い、今でも電球を一切使わない。少し暗めだが、提灯の中で揺らめく蝋燭の灯りの方が黄金色に映えて美しい。祭りの夜、二百四十本の竿燈に掲れる約一万個の提灯の行列は、圧巻であると同時に幻想的・神秘的であり、〝黄金の稲穂〟と表現される（**図表3―7**）。しかし、このビジュアル面での〝美しさ〟を実現するまでにも、さまざまなエピソードがある。一地方の祭りが、全国的な祭りに成長するまでには、「秋田竿燈のブランド化」という点で、やはり、いろいろ山積していた問題を解決しなければならなかったのだ。

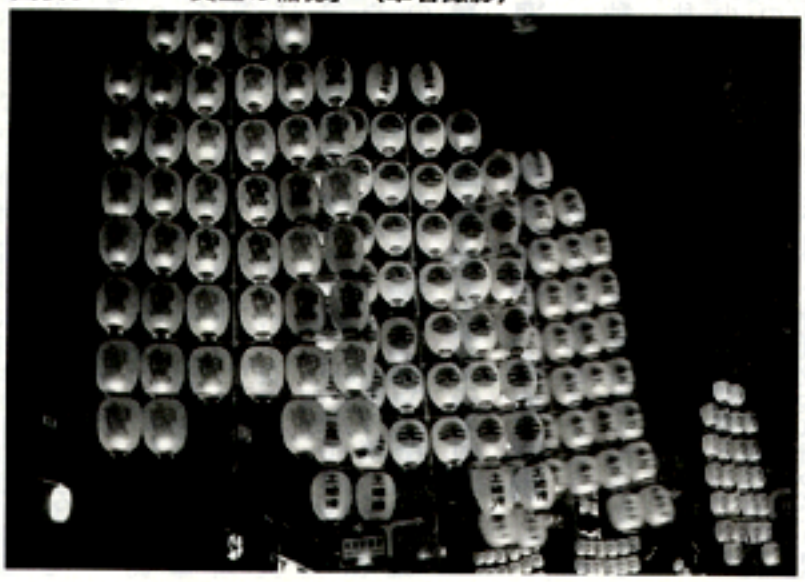
「俺たちのルール」に企業の理解を求める

現在、町内竿燈と企業・公的機関の竿燈の数は半々である。企業竿燈は、もちろん、会社の広告のために出竿するわけだが、「差し手」を企業内で育成できない場合は、町内竿燈会のスポンサーとなり、町内の「差し手」に企業竿燈を上げてもらう。このため、三十六ある町内竿燈会の中には、自分たちの町内竿燈だけを上げるところもあれば、町内竿燈と企業竿燈の両方を上げるところもある。ただ、企業の申し出を受ける町内側としては、資金的なやり繰りのためには企業をスポンサーに付けたいという事情と、「差し手」として幼少から親しんだ町内竿燈の半纏を着て、町内紋章の入った竿燈を上げたいとの本音が交錯するようだ。

実は、今では整然としている竿燈の提灯のデザインも、十年ほど前までは、ばらばらだった。提灯のデザインについての統一ルールがなかった時代には、企業竿燈の提灯には社名や宣伝が派手に入れられており、自分だけが目立てばいいという〝広告塔〟の本数が増加し続けたのである。一方、三十六の町内には、提灯の裏側に町紋を入れるルールがあった。この町紋は、江戸時代の秋田藩主（九代目・佐竹義和）が当時の三十六の町内にそれぞれ授けたデザインで、それを町内竿燈の提灯裏面に大きく入れることで、祭りの伝統や風情、町の歴史や先人たちの想いを表してきたのだった。九四年、三十六の町内竿燈会が所属する秋田市竿燈会では、スポンサー企業についても、派手な広告の廃止を要請することを決定。「国の重要無形民俗文化財としての相応しさ」を三年がかりで出資企業に訴え続け、最終的には全企業の同意取り付けに成功した。企業側からは、広告面が縮小したからといって出竿を取りやめる動きはなかった

図表3－6　竿燈の妙技（筆者撮影）

図表3－7　「黄金の稲穂」（筆者撮影）



という。青森ねぶたでも秋田竿燈でも、全国レベルの企業を「地方の俺たちのルール」に従わせてしまう。これが優れた祭りの舞台裏の面白さだ。

このように、企業にも厳しい注文を付ける秋田市竿燈会。実は、広告縮小要請を出す前の九一年には、秋田市全域が提灯で埋め尽くされることを夢見て「地域住民総参加」を掲げ、家々に各町の町紋入りの提灯を下げることを提案していた。その後、九七年までの七年間に二千六百個の提灯を配布し、市民からも協力と好評を得て、「地域住民総参加」の夢は一歩、進んでいる。

竹を「生き物」に変える職人魂

ほかにも、竿燈への関係者への〝こだわり〟は、観客に見えない舞台裏にたくさん存在している。「差し手」にとって、竿燈技は〝竹〟の持つしなやかさや耐久力をどう判断し、竿燈と自分との一体感をいかに表現するかに醍醐味がある。竿燈を「生き物」ととらえず、むやみに継竹で長くして竿燈の命を絶つ（折る）ような技は慎まなければならない。風の強さによっては、竿燈は弧を描くように大きくしなるため、「差し手」の最大の敵は〝風〟といわれる。名人になると、先に〝風〟を読み、竿燈と一体となって自然と身体がしなる。足元は微動だにせず、まさに職人技だ。竿燈には「力四分、技六分」との評があるように、「幼若」から上げている差し手には〝しなやかさ〟が備わり、大人から始めるとどうしても腕や肩の〝力任せ〟になって足元がぐらついてしまうらしい。

そして、真に竿燈を守る人たちは、この〝竹〟に込める想いが違う。「親竹」や「継竹」に使う竹は折れたり弱ったりで、一回の祭りで半分近くを補充しなければならない。ある程度の強度としなやかさを出すには、冬場に良質の竹を採りに山に入り、厳しい眼と手の感覚で選定し、虫がつかないよう軒下に吊して程よく枯らす。この管理が大変なのである。

竿燈の身体ともいうべき〝竹づくり〟から気持ちを込め、竿燈と一緒に練習を積んで〝一瞬の技〟に臨むのだから、それは単に妙技という表現では語り尽くせない。日本の重要無形民俗文化財としての価値は、妙技以上に、もっと奥の深い「竿燈に吹き込まれた魂」にあるのかもしれない。

茶髪か、坊主か

筆者が、竿燈まつりを調べていて特に興味深かったのは、町紋のデザインへの〝こだわり〟と同様、祭りに参加する人たちの服装、即ちファッションである。江戸時代は、褌や法被姿というまちまちな出で立ちであった。それが、一八八一年（明治十四年）に明治天皇が東北を巡幸した際、町内ごとに浴衣・長半纏を揃えたそうである。町内竿燈では、半纏に入れる町紋の位置や入れ方まで決まっている。まして、「差し手」の茶髪やピアスなど許されない。それは、重要無形民俗文化財に相応しい出で立ちとはどういうものかということに、先人たちに恥じることがないよう自分たちで責任を持たなければいけないとの哲学があるからだ。そこまでの〝こだわり〟があるから、竿燈まつりは観客にとっても整然と清々しく、熱い中にもどこか厳かで美しいのだろう。

現代の若者はファッションとなると、自由で個性的な表現を好む。竿燈まつりのために帰省して、細かく言われるのには抵抗があるのではないか、と想像してしまうが、竿燈を上げたい若者の中に

は、今の茶髪で竿燈をあきらめるなら、いっそ、スッパリ坊主に……との意気込みで参加する者もいるという。一九八〇年から「囃子手」として祭りへの参加が認められた女性に対しても、茶髪はもちろん禁止。それでも毎年、囃子手になるために笛や太鼓を習いたいという若い女性たちは増え続けている。

竿燈に関するスタイルの統一は、決してしきたりや様式の強制ではなく、どこか精神統一に近いものすら感じた。形を変えて、現代の若者に〝竿燈職人の意地〟が引き継がれているようだ。

過去と将来を見据え、今を表現

秋田竿燈に思う

秋田市竿燈会の会員数は現在三千人で、大きく減少はしていない。しかし、実際問題として、祭りの参加者の半分は、秋田の土地を離れていてこの時期だけ戻って来る、一昔前の〝秋田っ子〟である。この〝祭り帰省〟の数字が物語るものは、やはり「地方都市に、若者が働ける職場が少ない」という現実だ。竿燈が大好きな一昔前の〝秋田っ子〟たちの中には、「職場さえあれば、住み慣れた文化豊かな町を出て行かなくてよい」という者も少なくない。

秋田市でも他の地方中核都市と同様に、中心市街地からは子どもの姿が減っている。七〇年代後半ごろから、商業地となった中心部から郊外や他地域に居住者が転出していったことが最大の要因であり、それに少子化傾向が追い討ちをかけているからだ。

竿燈まつりを支えているのは、こよなく竿燈を愛する地域の人たちにほかならない。しかし、「祭りを、毎年継続する」ことが目的化するのでは、何か物足りない。「伝統的な郷土芸能に育てる」ために先人たちがひたすらこだわってきたように、その「ブランドをさらに磨き、維持すること」が秋田竿燈を行う真の目的なのだと、筆者には思えてならないのである。

秋田竿燈を取材し、祭りを堪能した後で、ふっと想い出すのが、〝山で竹を見極め、竹に命を吹き込む職人魂〟の存在。そうした〝その人しかいない〟と言われる職人の地味な技術に、計り知れない価値を感じてしまうのは、筆者が祭りの苦労を知らない余所者だからだろうか……。

東北の祭りから学ぶもの

筆者が今回の東北祭り巡りで学び、驚いたのは、数日で数百万人の観光客を集め、いろいろな国際大会にも出演している秋田竿燈の現在の繁栄も、青森ねぶたを全国・世界の祭りに育て上げた『観光キャラバン』が全国にねぶたの存在を知らしめようと奔走したのと同様、戦後に「郷土芸能に育てよう」との強い決意と努力によって獲得したものだったことだ。

一般の人間にとって、『伝統の継承』という言葉には、どこか縁遠い響きがある。〝伝統〟と聞くと、能楽や歌舞伎の世界のように〝血筋〟があり、生まれた時から美的感覚や技術が厳しく教え込まれていく世界、だという思い込みもある。筆者も、今回取材した東北の三つの祭りについて、〝伝統〟なり〝重要無形民俗文化財〟という言葉の威厳が強過ぎて、大昔に出来上がった格式高い様式や〝形〟を市民が必死になって守り、伝えているものだと想像していた。しかし、「守る」「伝える」ということ自体が、筆者が考えていたような、そんな安易なものではなかったのである。いずれも、名も無い町民や農民の地域行事だったものが、江戸、明治、大正、そして戦後……という数百年の時を重ね、政治や経済といった時代の波にもまれながら、紆余曲折を経て、変化し成長し続けてきた。そこには時代の流れもあり、〝人の力〟だけではどうにもならないこともあったろう。

今回の東北祭りを見る限り、伝統的な祭りとは、「昔の姿」を伝えることではない。「今を、生きている人たち」が、今の時代における「祭りの存在」を必死に考え、つまり歴史から先人に学ぶべきものは何かを考え、将来の次世代に伝えるべき大切なものは何かを考える機会なのだ。過去や将来に〝恥じる〟ことがないよう、そして今を精一杯楽しみ、一瞬に輝ければよい。

過去と現在と未来とをつなぐ、その〝時の繋ぎ手〟は地域の人。だから、祭りには、時代を超えた悠久の精神性を感じてしまうのかもしれない。